## ガーデニングブーム考

月 黒 修 治

1998年8月1日~10月18日の約80日間に渡って、第15回全国都市緑化フェアー新潟大会が盛大に行われた。期間中、地方気象台観測史上希に見る不順な天候にも関わらず、のべ97万にのぼる人々が会場を訪れ、世界の花・日本の花々及び多様なイベントを楽しんだ。

日常の生活の中では滅多に見られないものをふんだんに 楽しみ、植物と触れ合い、多くの人と出会うことは、それ だけでも心豊かになれるであろう。緑化フェアーを通じて 心慰められ、花や緑への関心を持つキッカケになれば、お おいに効果ありと考えても良いと思われる。

昨今、ガーデニングに対する人気が急激に上昇している という。経済低迷の中で、-躍注目され活気を呈している。 暗い話題が多い中で数少ない明るい話ではある。ガーデニ ングは、自然と触れ合う機会が少ない都市生活者にとって、 潤いを感じられるささやかな楽しみなのかもしれない。

しかし、ここで少し気になることがある。「今、なぜ、ガーデニングブームなのか」。かつて、私達の祖先は森に生まれ自然の恵みによって生かされてきた。食べ物・住処・衣服・医薬品等、生活に必要なすべてのものを自然の中に求め、海や川や森に依存して生活してきたのだと思われる。

狩猟を生業とした時代から農耕の時代へと変化する中で、 最も重要な「食料」を計画的に生産する技術を獲得し、食料を備蓄することで生きるための「担保」を獲得し、富の 集積が始まった。この時から、人間と自然との「乖離」が 始まったのであろう。以来、文明の発達(?)は自然と人 聞との乖離を拡大し、都市の構築とそれへの集中が進み現 在に至っている。

つまり、都市とは、その本質において反自然を飽くことなく追求し続けてきた結果の産物ということではなかろうか。もしそうであるならば、今日の都市生活者が、競ってガーデニングに意を注ぐのは、都市化への過程の中で、どこかに置き忘れてきた『人間本来が持っていた自然の部分を取り戻す行為』と考えられる。

いかに産業が発達し社会構造や生活スタイルが変わろうと、100年や200年程度では人間の本質は変わり得ないであろう。とりわけ日本においては、敗戦から50余年、まさに0から出発し物質的な豊かさを求めて、経済性・効率性のモノサシ1本ですべてを測り、わき目もふらず猛進してきた。その結果、世界の経済大国にはなったが心の中に大きな穴が空いてしまっていることに気がつき、不安に駆られて立ち止まってしまっている、そんな状態が今日ではなか

ろうか。

「衣食足りて心の空虚さを知る」を補完してくれる物が鉢 の花であり、庭の緑や花々であろう。ガーデニングはその 意味において、人間が本来の人間的な心を取り戻すための キッカケのように見える。

そのガーデニングが今ブームだということは、それだけ 我々の心が乾ききって荒んでしまっていることを意味する。 連日新聞やテレビ等から流れるニュースでもそれは背ける が。人間が本来の望ましい人間に戻るためにガーデニング がブームになること、それ自体に対して異論は無い。しか し、『その先に有るもの』についても少し考えておく必要が ある。

ガーデニングで使われているのは、そのほとんどが園芸植物と呼ばれる「人間の手によって人工的に作り変えられた製品」である。もちろん植物であるから生きていることに変わりはないが、自然物ではない。見た目は自然でも、人間の嗜好や価値観に添うように改変された「製品」であるという事実。このことは、ガーデニングブームが増大すればするほど、新たに次のような問題が発生することを意味する。

- ① 園芸品種を作り出すために使用される「元になる個体」は、自然界に自生する植物である。そのため、ブームが進めばそれだけ自然から採取される個体数が増えることになり、乱獲によって絶滅する種類が生ずることになり易い。特に、珍しい種類や園芸的価値の高い種類ではその危険度が大きい。
- ② 自然界の中で、既に生育個体数が減少していたり、絶滅の危険性のある種類について、これを防ぐために同一種(?)を自然の中に植え戻す場合がある。この時には往々にして園芸品種が用いられるが、人工的に遺伝子構造の異なった園芸品種が自然界に戻されると、自然界において遺伝子の撹乱が生じ、原種が消滅する等の混乱が生じる可能性がある。

本来ガーデニングは、都市生活者が自然(疑似自然)に 親しむための簡便な方法であるはずが、それによって我々 は更に自然を傷つける可能性が有ることも認識する必要が ある。

もともと都市は、自然に背を向けることで都市独自の利点を獲得してきた訳であり、都市生活者は自然から受けて

いた恩恵を放棄する代償として都市的な利便性や快適性等 を享受してきた訳である。

であるならば、都市に居ながらにして自然の恵みをも求 めるのは少々虫が良すぎるのではないだろうか。自然の恩 恵に浴したいなら、自らの足で自然の中へ入れば良い。自 ら自然に近づく努力をしないで、すべてを手に入れようと

はマルバマンサクといわれ

んでいて私も大好きである所に白、

ているうちに花を付けてい 歴生山では、まだ雪の残っ でいえば「雪割り草」を真 けるものといえば、樹木で

いえば「マンサク」、英宏

先に思いつく。

マンサクは新加丘陵や護

るもので、三月の初めくらる。 る。本県に自生しているの

いに花を付ける。

ころから付けられたなどの 年は豊年「湖作」になると

や、この花がたくさん咲くを指すこともあり、本県で

は図鑑名オオミスミソウ (大三角草)のことを管割

> 野草ブームのため乱獲にあ このオオミスミソウ、山

春一番に咲くため、縁起のよい花とされるマ

マンサクになったという説 域によっていろいろな植物 覚えている。

さく(咲く)」がなまって の仲間を指す。しかし、地 たくさん写真を扱ったのをマンサクの名は、「まず 割りなといえばサクラソウ 意乱れていて、うれしくて

ところで一般的には、雪ざまなオオミスミソウが咲

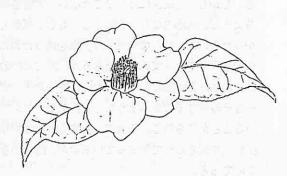
形も

重、八重、などざま 、桃色、 紫色の、 すれば、どこかに「歪み」が生じることは避けられないの ではないか。

もともと自然にあるものは、そのまま自然の中に置き、逢 いたい時に自らが足を運ぶべきではないか。それが自然と 付き合って行くための「大人のマナー」だと思われるが… ……如何なものだろうか。 [(株) グリーンシグマ]

# 書割り首 な園芸採取や希少種の乱獲

報 新 賜 (火曜日) 1999年(平成11年)3月2日



岛 悦 子 木

### てきた。まだ寒い日が続く がするが、この花が咲くと と呼ぶ方がしっくりくる。 が、寒さが厳しければいっ いよいよ春が近いことを感 説がある。黄色い細い花びり草と呼んでいる。私自身 る。色や花の形が変異に富ときだった。あたり一面至 新潟の春を代表する花であ じるのである。 らが弱々しく類りない感じ もこの花をオオミスミソウ 質割り草は何といっても 年ぐらい前、高校の生物部 の仲間と下越の山に登った スミソウを見たのは、二十 わたしがはじめてオオミ □42□ は日本の固有植物の絶滅原

そう容が待ち遠しい。ただ

の今は「寒さは平年並み」

ど寒くはなかったように思 と

夫

気

予

報

で

言って

い

た

ほ

ところで、存先に花を付

行を予感させる季節になっ

少しずつ寒さが和らぎ、

## h

因の二五%近くを占め、大 くところによるとこの山の オオミスミソウも大きな被ようとする目的は評価にや きな問題になっている。明

という動きが最近でてき ことで自然復元を目指そう おり、荒れた山野を復元し のミスミソウを山に植える その動機は善意からきて

遺伝子は、それ自体が何万

もし、その植物固有の遺

かまったく分からない不思

議な植物になってしまうの 植物はどういう由来のもの

る。

示す重要な情報の宝庫であ 城に入ってしまえば、その

るために、栽培したオオミ いることを指摘しなければ で独自に受け継がれてきた スミソウや、ヨーロッパ種ならない。 否を受けているという。 ところで、これを回復す に大きな「誤り」が潜んで いわれるものである。地域 ぶさかではないが、その中

美 竹 田 香





本県の山に春到来を告げるオオミスミソウ

回復や自然復元を行ってい そこまで考えた上での自然 めればその個性を軽重する ことである。人間に当ては あり、その地域を軽重する 成り立ちを軽重することで ということなのである。 である。 くことが求められているの 二十一世紀においては、 五十嵐 実

(専門学校副校長)

にとらわれて復元しても、 など表面に現れる形質だけ 誤りを犯すことになるので ったく同じには復元できな に失われてしまう。 た遺伝子の持つ情報は永久 私たちは植物の形や色 度失われたものは、

である。そして、本来あっ

ということは、その植物の 地域の遺伝子を尊重する